

行儀よくやり給え

—生物生産学部長 角田俊平—

卒業おめでとう。この言葉を卒業する諸君へ贈ると同時に、君達をここまで育み、晴れて卒業する諸君をみて、喜びの涙をおさえきれないでおられる御両親にも贈りたい。親にとって子はいつまでも子であり、君達の喜びが即、御自身の喜びであるからである。諸君は今日、この喜びを十分かみしめていることと思うが、同時に心から御両親に感謝の意を表してもらいたい。そういう人間であることを願うが、このことは諸君が親になって初めて理解できることも知れない。

さまざまの事思い出す桜かな 芭蕉
卒業に際してさまざまな思いが去来していることであろう。いま諸君は大学を去るに当たって決意を新たにする一方で、これまで慣れ親しんできた学園生活から離れることに一抹の不安を覚えているかも知れない。しかし諸君は若い。大道をかつ歩する素質と教養を身につけているはずである。初心忘るべからず。それぞれの才量と力量を尽くす努力を怠ってはならない。

とはいえ社会に出ても、各自が学生時代と一変することはあるまい。これからは今まで以上に約束ごとをしっかりと守る必要があると同時に、一人前の社会人として人に接する時、相手への気配りも大切である。その上で、これからどう行動するかは人それぞれの問題である。信ずるところに従って、自らの力で己の道を拓かねばならない。現代っ子の君達はそういうやり方を得意とするはずである。いささか頭が固いといわれる我々の世代にとって、やや気がかりなことは、世の中万事がカネといった風潮があり、厳しさ、苦勞、忍耐

をできれば避けようとする気風がみられることである。この世はカネ次第という考え方をまったく否定するわけではないが、社会において信頼できる人物が最も貴重であり、耐え忍ぶことも場合によっては必要である。また人と人との出会いは、カネとは比べものにならないほど尊い。これからの人生にはさまざまな人との出会いがあると思う。その出会いが諸君を高揚させ、君達の人生を左右することもある。

六代目菊五郎が若い松緑に「お前まずくってもいいから行儀よくやれよ」と言ったという。(「松緑芸語」講談社刊)。いまこのことを君達へ特に言いたい。さて「行儀がいい」とはどういうことなのだろうか。山口瞳氏は次のように言っている。僕等は、物心ついでからずっと家庭でも幼稚園でも小学校でも「お行儀よくしなさい」と言われ続けてきた。僕はいまだにわからないのだが、菊五郎の言はんとしたことは、漠然と理解できる。ビジネス書を読んで生かじりの横文字をやたらに振り回す奴。出入りの業者にいばる奴。気取る奴。背伸びする奴。上司におもねる奴。こういう社会人を誰も行儀がいいとは言わないだろう。長年の経験で、行儀のいい人は最初は少しも目立たないけれど、ある時期になると、ポーンと飛躍的に伸びることを知っている。社会人としての酒の飲み方についても同じことが言える。「酒を飲むときは行儀よく飲め」。そうだ、菊五郎になりかわってこう言おう。「時にはははめを外すことがあっていいから、ともかく行儀よくやれよ」。

御自愛と御健闘を祈る。